

625
203

東京市佛貨公債訴訟事件報告書

東京市電気局編



2

0031488-000

625-203

東京市仏貨公債訴訟事件報告書

森原嘉逸・著

東京市電気局

昭和7

AEB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

東京市佛貨公債訴訟事件報告書

東京市電氣局

東京市佛貨公債訴訟事件報告書

發行所寄贈本

目次



第一節 實體上ノ事件	一
第一款 佛貨公債ノ本質	一
第二款 訴訟提起迄ノ経緯	一四
第三款 當事者双方ノ主張	一四
第一項 佛國債券所持人側ノ主張	一四
第二項 東京市ノ主張	一八
(附)「デイジョン」判決ヲ評ス	二三
第四款 (引例)英佛間ニ於ケル「ラント・フランセーズ」公債問題	二七



625-203

東京市佛貨公債訴訟事件報告書

森原嘉逸述



概要デアアル。
私昭和六年十月渡歐シ昭和七年七月歸朝シタ我東京市對佛國債券所持人間ノ法公債訴訟事件ニ關スル善後處置ガ其使命デアッタノデアアル本冊子ハ其報告ノ概要デアアル。

船路ヲ取ツタ爲メ私ガ巴里ニ着イタノハ昨年十二月デアッタ時恰モ「デイジョン」控訴院ハ東京市ニ不利ナル判決ヲ下シ我東京市ハ該判決ニ對シ上告スルヤ否ヤハ分岐點ニ立ツテ居タノデアアル東京市側デ頼ンダ「ルツセ」辯護士其他モ上告出來スト云ヒ隨テ殆ド此判決ニ服從スルノ外ハアルマイト云フ見解デ彼地ニ於ケル狀況ハ必ズシモ東京市ノ意見ト一致シテ居ナカツタノデアアル。

第二節 契約解除請求事件(派生事件ノ一).....	三四
第三節 差押異議事件(派生事件ノ二).....	三八
第四節 其他ノ諸問題.....	四三
第一款 裁判管轄ト準據法ノ問題.....	四三
第二款 佛國裁判ノ國際的效力ト強制執行.....	五一
第三款 時効ト其中斷.....	五三
第五節 結 言.....	五四
附 錄	
一、一九一二年發行佛貨公債寫真並ニ券面記載事項ノ譯文.....	一
二、東京市條例.....	一

私ハ考ヘタ、苟モ特別規定ナキ限リ控訴判決ノ不法不當ヲ是正スル道ガナイコト
ハアルマイト、ソコデ巴里着ノ翌日カラ「ジャン・ラベ」博士等ニ就キ研究ノ結果、適法
ニ上告出來ルコトヲ確メタノデ此旨詳細東京市ニ報告シ且ツ請訓シタ處、市ハ豫
テ上告ヲ要望シテ居タコトトテ直チニ上告セヨトノ返電ニ接シタ、ソコデ辯護士
ハ「ラベ」博士ニ依頼シ上告手續ヲ取ツタノデアアル、又一審事件ニ就テハ十九件ニ及
ンデ居ル(昭和七年八月現在)ガ從來ノ辯護士「ルツセ」氏ハ右「デイジョン」判決ニ對シ
上告出來ヌト言明シタル關係等種々ナル事情ニ因リ同氏ノ辭意モアリ旁々從來
ノ勞ヲ謝シテ新タニ「ビーエル・マツス」博士ヲ選任シタノデアアル。

「マツス」博士ハ控訴院所屬辯護士ニシテ前陸軍副大臣デアリ「ラベ」博士ハ破毀院辯
護士ニシテ參事院ノ辯護士デアリ共ニ彼國一流ノ辯護士デアアル、尾崎元市長モ歐
洲漫遊ノ途次、私ノ依頼ヲ容レ本年一月下旬「マツス」博士ニ面會シテ發行當時英貨
公債ノ外別ニ佛貨公債ヲ設ケタ事情ヲ詳細ニ話シテ下サツタノデアアル。

又佛國デハ辯論ノ衝ニ當タル辯護士ノ外ニ代訟人(Avois)ヲ任設スルコトガ必要
デアアル之ハ代理人トシテ爲ス一切ノ權限ヲ有シ又辯論ノ準備等ヲモ司ルノデア

ル市ハ從來通り巴里デハ代訟人ニ「ル・コワント」博士ヲ依頼シタ。

(二)

事件ハ本文記載ノ如ク一、九一二年我東京市ガ佛國ニ於テ發行セル法公債ノ支拂
ヲ「舊時ノ法即チ「ゼルミナル」法(革命曆十一年芽月法)ニヨリ支拂フヘシ」(俗ニ金法
拂ノ請求ト稱ス)ト云フ訴ト「發行當時ノ磅ニ換算シ之ヲ支拂日ニ於ケル爲替相
場ニヨリ法ヲ以テ支拂フヘシ」ト云フ訴ト二種ノ訴訟デアアル、而シテ該訴訟ハ其
成否如何ガ目下尠クトモ四千萬圓以上爲替相場ノ騰落ニ依リ變動アリ且ツ金法
拂ノ請求ト磅換算拂ノ請求トニ因リ差異アリノ影響アル重要案件デアアル、サレバ
トテ我東京市ハ金額ノ多寡ヲ以テ争フノデハナイ、徹頭徹尾正論我ニ在ルヲ確信
スルガ故ニ應訴シテ居ルノデアアル、元來此公債ハ額面佛貨五百法ノ公債デアリ隨
テ法ヲ以テ拂込ミ又其償還モ法ヲ以テシ當事者間ニ争ハナカッタノデアアル、此ノ
如クニシテ大正五年第一回償還以後十一年間、何ノ苦情モナク法ヲ以テ授受サレ
來ツタ此法公債ガ何故今ニ及ンデ争訟ノ的トナルニ至ツタ乎。
之ガ原因ヲ究ムルニハ遙カニ十五年前ニ溯ラネバナラヌ、本件公債發行後間モナ

ク一、九一四年「バルカン」ノ一角ヨリ點火サレタル世界大戰ハ爾來四个年ノ久シキニ亘リ歐洲全土ヲ荒廢セシメ爲メニ戰後ノ歐洲產業界ノ萎微甚シク延テハ世界經濟界未曾有ノ大變革ヲ齎スニ至ツタノデアアル佛國モ亦當然此ノ影響ヲ蒙リソノ貨幣タル法^{フラン}ノ價值ハ逐年暴落ヲ續ケタルガ爲メ本公債ノ佛國所持人等ハ從來通りノ法拂ヒヲ以テシテハ到底ソノ満足ヲ得ルコト能ハザルニ立チ至ツタノデアアル本件訴訟提起ノ主タル原因ハ實ニ此處ニ潜ンデ居ルノデアアル。

一部論者ハ佛國ノ平價切下ガ動機ナルガ如ク見テ居ルガ訴訟ガ一、九二八年ノ平價切下ニ先ダツコト二年前カラ提起サレテ居ル事實ヲ見テモ識者ハ容易ニ訴訟提起ノ真相ガ平價切下ノ如キ佛國政府ノ一財政々策ニ在ルニ非ズシテ佛政府ヲシテカ、ル財政々策ヲ採ラザルヲ得ヌニ至ラシメタ彼國經濟界ノ變動並ニ之ニ伴フ損害ヲ豫期シテ周章狼狽セル佛國債券所持人等ノ損害防止策コソ本件ノ真相ナルコトヲ察知サル、デアラウ極言スレバ戰後ニ於ケル佛國經濟界ノ變動ガ齎シタ法貨^{フラン}ノ價值暴落ナカリセバ佛國所持人等ハ何等苦情ヲ云フ事ナク從來通りノ法支拂^{フラン}ヲ以テ甘ンジ從テ本件訴訟ハ提起セラレナカッタト云フベキデアラ

ウ。

本件訴訟ノ動機此ノ如クナルニモ拘ハラズ事實審ニ於ケル判決ハ巴里控訴院ニ於テ東京市側ニ有利ナル判決ヲ下サレタル外他ハ悉ク市側ニ不利ナル判決デア

ル而シテ上告ノ結果昭和六年一月佛國破毀院ニ於テ「セルミナル」法ニ依ル支拂要求ハ不當デアアルト日本側ニ有利ナル判決ヲ下シ同時ニ「本件公債モ磅公債ノ一部ナルガ故ニ磅ニ依リ計算シテ支拂フベシ」トノ趣旨ノ判決ガ下サレタ、而シテ「デイジョン」控訴院ニ於テハ「發行當時ノ磅換算額ヲ支拂當時ノ磅相場ニ依リ支拂フベキ旨」ノ判決ヲ下シタノデアアル甚ダ了解シ難キ判決ニシテ若シ此判決ヲ是認スルナラバ世界ニ類例ナキ珍奇ナル公債ヲ創造スルコト、ナルノデアアル(本文第一節中東京市ノ主張ノ末段參照)

即チ問題ハ「磅公債」ナリヤ「法公債」ナリヤノ點ニノミ懸ツテ居ル而シテ其磅公債タルコトヲ示スベキ根據ニ乏シク法公債ナルコトハ證券自體ニ依リ又其發行契約等ニ徴シ洵ニ明瞭ニシテ發行當時佛國發行分ハ佛國應募者側ニ於テ特ニ「法貨」ノ債券タルコトノ要求アリ森財務官ヨリ此旨我政府ニ通牒アリタルガ爲メ當初英

國ニ於テ全部發行シ場合ニ因リ一部ヲ内國債ニ變更セムトシタルヲ改メ磅公債ハ倫敦及紐育ニ於テ發行シ法公債ハ巴里ニ於テ發行シタト云フ經緯ガアルノデアル、森財務官モ亦東京地方裁判所ニ於テ同趣旨ノ證言ヲ爲シ管ニ我々ガ法公債ナルコト明瞭ナリト主張シテ居ルニ止マラズシテ巴里控訴院判決モ亦其磅公債ニ非ザル理由ヲ明カニシテ居ルノデアアル。

(三)

茲ニ又佛國政府ガ我東京市ノ主張ヲ認メネバナラヌ否既ニ之ヲ認メテ居ルト見ラル可キ事案ガアル、「ラント・フランセーズ」公債事件即チコレデアアル。

本文詳記ノ如ク一、九一五年以降四ケ年ニ亘リ佛國政府ガ英國市場ニ於テ募集セル公債「ラント・フランセーズ」(別名國防公債)十六億四千萬法餘ニ就テハ英國市場募集ノ分ハ法定換算率ヲ定メ磅ニテ拂込ミタルモノナル爲メ英國政府ハ磅拂ヒヲ主張シ反之佛國政府ハ現在ノ法拂ヒ(一九二八年平貨切下後ノ法)ガ正當ナリト主張シ最初ノ償還期一、九三一年一月以來解決スルニ至ラズ今ヤ利子ノミヲ支拂ヒテハ證券ヲ書キ換ヘ英國政府ガ仲裁裁判ニ付セムトノ提議ニモ應ジナイノデ

アル、(私ガ本年二月調査シタ當時モ現在モ同ジ状態ニ在ル)私ハ此「ラント・フランセーズ」事件ニ關シ佛國ハ發行地ガ佛國ナルト英國ナルトヲ問ハズ一率ニ五百法ノ佛貨公債ヲ募集シテ居ル點ニ於テ佛國側ハ主張ヲ正當トスベキナリト思フ、唯英市場ノ分ハ磅デ拂込マシメテ居ルト云フコトガ佛國側ノ一ノ弱點ナノデアアル、反之我東京市佛貨公債ニ至テハ管ニ五百法ノ公債ナルノミナラズ之ガ拂込償還モ亦從來法ヲ以テ授受サレタモノデアリ此點東京市ノ立場ハヨリ以上ノ強味ガアルト云ハネバナラヌ、此場合ニ於ケル佛國政府ノ英國政府ニ對スル主張ヲ是認スルナラバ勿論解釋ニヨリヨリ強キ理由ヲ有スル我東京市ノ主張ハ當然是認セラレネバナラヌノデアアル、否寧ロ佛國ノ英國ニ對スル主張ハ我東京市ノ佛國所持人ニ對スル主張ヲ是認スルコトヲ前提トシテコソ始メテ首肯シ得ラルルモノト謂フ可キデアアル。

然ルニ何ゾヤ!佛國政府ハ英國所持人ニ對スル「ラント・フランセーズ」公債ニ付テハ現時ノ法拂ヲ主張シテ居ルニモ不拘、我東京市公債ノ如キ等シク額面五百法ノ公債ナルニ拘ラズ所持人等ハ之ヲ磅公債ナリト曲論シテ居ルノデアアル、彼ノ所謂「遣

ラズ取ツタリ」的主張ハ實ニ諒解シ難ク御都合主義モ亦極レリト言ハネバナラス。我東京市ハ徒ラニ争ヲ好ムモノデハナイ彼ノ所持人等ノ不正不當ナル訴訟ニ對シ已ムヲ得ズ應訴シタノデアツテ我正當ナル主張ヲ貫徹スル迄ハ飽ク迄正論ヲ高調シテ進ム積リナノデアアル。

(四)

此點ニ關シテハ世上往々誤解アリ東京市ノ主張ノ正當ナルコトヲ知ラザル人尠カラザルノミナラズ却テ佛國ニ於ケル平價切下ハ佛國自ラ行ヒタル點ニ於テ債券所持人ニ同情スベシトノ所謂同情論アルモ之ハ同情ノ穿キ違ヘデアアル一九二八年平價切下以前ニ於テ佛國ノ貨幣價值ハ著シク暴落シ甚シキハ十分ノ一ニ至リタルコトモアルノデアアル平價切下ハ當時ノ世界的ナル法^{フランス}ノ價值ヲ法定價值ト爲シタルニ過ギザルモノト見テ至當ナノデアアル況ヤ前述ノ如ク平價切下以前カラ訴ヲ提起サレテ居ルノデアアル妄ニ同情論ヲ以テ云爲スルハ當ラヌノデアアル。

(五)

本件ト相似ノ訴訟ハ關係スル所廣ク「ユーゴスラヴィア」「ブラジル」「希臘等十二個

國ニ及ンデ居ル其中デ我東京市ハ分ハ前述ノ如ク所謂金貨約款ナク最有利ナル地位ニ立ツテ居ル併シ乍ラ爾餘ノ諸國ノ事件ノ判決ハ從來凡テ公債發行者側ニ不利ニシテ佛國債券所持人側ニ有利デアリ而モ日本ノ分ニ就テモ意外ニモ磅公債ノ一部トシテ換算拂ヲ命ジ復タ國防公債ニ對スル主張ハ前述ノ如ク英國所持人ニ不利ナル爲メ著シク公正ヲ害スルモノデアアルトノ批難ハ鮮クナイノデアアル。

(六)

私ハ前述ノ如ク不束乍ラモ第一線ノ防備ヲ爲シ又「デイジヨン」判決ニ付テハ上告ノ手續ヲシテ置イタ尙此上告ニ對スル判決ハ明年ニナル見込デアアルト「ラベ」博士ハ言ウテ居ル佛國及白耳義ニ於ケル訴訟事件ノ中各一件ハ相手方ハ方デ取下ゲタガマダ佛國ニハ新訴モ續々起ツテ居ル佛國所持人側デ示談シタイト云フ希望モアルガ先方ノ云フ程度ガ低イカラ相手ニシナイデ居ル局面ハ今後益々展開サレルデアラウシ殊ニ訴訟ノ衝ニ當ル主ナル相手方ハ彼國デモ有名ナル事件師「ベレンシユタイン」「ポノー」等デアアルカラ尙前途幾多ノ曲折モ豫期シ得ルノデアアル又過去ノ事實ニ徴スレバ公正ナルベキ事件ノ裁決モ時ニ吾人ノ期待ヲ裏切ツテ

正邪曲直其ノ歸趨ヲ謬ルコトナキニシモ非ザルヲ以テ我等ハ今尙銳意對策ヲ考究中デアアル。

本問題ノ國際的重要性ヲ認識セラレテ學者、實際家等大方ノ垂教ヲ賜ハラバ幸甚デアアル。

第一節 實體上ノ事件

第一款 佛貨公債ノ本質

本件ノ内容ヲ述フルニ當ツテハ先ヅ佛貨公債トハ何ゾヤノ問題ヲ明カニセネバナラス。

我東京市ハ明治四十五年(一九一二年)電氣事業經營費トシテ約一億圓ヲ要スルノデ英貨九百十七萬五千磅ノ公債ヲ發行スルコトト爲ツタ。

當時ノ市長竝ニ監督官廳タル大藏當局ハ最初英國市場ニ之ガ應募者ヲ需メムトシタルガ爲メ其總額ヲ英貨九百十七萬五千磅トシテ認可ヲ申請シタ、ソシテ若シ

モ不足ヲ來シタ場合ハ一部ヲ内國債デ補充スル方針デアツタノデアアル。

トコロガ此折衝ニ當ツタ森財務官カラ「大部分ヲ英國市場ノミデ募集スルコトハ困難デアアル、ダガ幸ヒ米國及佛國ニ於テモ應募シテ吳レサウダ」トノ報告ガアツタノデアアル、而シテ米國ハ英國デ發行スル英貨公債(磅公債)デ構ハヌガ、佛國ノ分ハ佛貨公債(法公債)デナケレバ投資家ガ肯ゼヌト云フコトデアツタ。

ソコデ佛蘭西ノ分ハ巴里デ佛貨公債トシテ發行シ英國及米國ノ分ハ倫敦デ英貨公債トシテ發行スルコトトナリ市條例第一號(明治四十四年十月四日)ニ於テ「一部ヲ内國債ニ變更スルコトヲ得」トアツタノヲ市條例第二號(明治四十五年二月二十日)ニ於テ「一部ヲ佛貨公債ニ變更スルコトヲ得」ト改メ更ニ其應募額ニ依リ市條例第三號同年五月二十二日)ニ於テハ次ノ如ク明記シテ居ル。

第一條 電氣事業公債條例ニ依リ發行スル公債ハ英貨五百十七萬五千磅及佛貨公債一億八十八萬法トス。

第二條 英貨公債中三百十七萬五千磅ハ英國ニ於テ二百萬磅ハ北米合衆國ニ於テ發行シ佛貨公債ハ佛國ニ於テ發行ス

第三條 英貨公債證書ハ額面二十磅百磅二百磅ノ三種トシ佛貨公債證書ハ額面五百法トス

即チ佛貨公債ハ佛國應募者側ノ要求ニ因リ法^{フランス}ノ公債ヲ發行シ法^{フランス}ヲ以テ拂込^{フランス}ヲ受ケタノデアツテ彼ノ磅ヲ以テ拂込^{フランス}ヲ受ケタル英貨公債トハ其成立ノ基本ニ於テ判然區別セラレタ公債デア^{フランス}ル。

第二款 訴訟提起迄ノ經緯

本件公債ハソノ元利ヲ大正五年(一九一六年)ヨリ向フ三十七个年間ニ償還スベキ公債デア^{フランス}ル。我東京市ハ大正五年以來償還期ノ到來ト共ニ之ガ償還ヲ履行シ法^{フランス}ノ騰貴スルト下落スルトニ關セズ年々額面五百法^{フランス}及利子年額二十五法^{フランス}(下記ノ如ク佛國諸稅ヲ差引キ)ヲ支拂ヒ來ツタノデア^{フランス}リ又佛國所持人トノ間ニモ何等異議ヲ見ナカツタノデア^{フランス}ル。

然ルニ大正十五年(一九二六年)五月ニ至リ突如フルリオ^{フランス}氏ガセーヌ^{フランス}商事裁判所ニ訴訟ヲ提起シタルモ間モナク同氏自ラ之ヲ取下ゲタトコロガ次デ同年十月ニハ「ジャンヌ・アカール」氏外二名ノ事件更ニ昭和二年二月ニ債券所持人利益擁護委員會代表ボノー^{フランス}氏ノ事件ガ何レモセーヌ^{フランス}民事裁判所ニ出訴セラレ爾後續々新訴

ガ起ツテ居ルノデア^{フランス}ル而シテ何レモセルミナル法^{フランス}ニ依ル法^{フランス}ヲ以テ支拂フカ然ラザレバ磅ニ換算シテ支拂フ可シト云フ訴デア^{フランス}ル何故ニ十一年間何等苦情ハナカツタ此法^{フランス}公債ノ法^{フランス}拂^{フランス}ニ對シスル爭ヲ起シテ來タ乎。

茲ニ戰後歐洲經濟界ヲ蕭條シツツアル金融恐慌ニ想ヒヲ致サネバナラヌ公債發行後二年ニシテ勃發シ爾來四ケ年半ノ久シキニ至ツタ彼ノ世界大戰ハ歐洲產業界ヲ疲弊セシメ延テ世界經濟界ノ大變革ヲ齎シタ之ガ爲メ戰後佛獨露何レモソノ貨幣價直ガ著シク下落シ佛蘭西ノ貨幣タル法^{フランス}ノ價值モ一九二四年頃ヨリ釣瓶落^{フランス}チト爲リ甚シキハ公債發行當時ハ法^{フランス}貨ハ十分ハ一ニサヘ下落シタコトモアリ之ガ對策トシテ佛國政府ハ一九二八年ニハ平價ヲ五分ノ一ニ切下ゲテ經濟界ノ均勢ヲ保持セムトシタ事實サヘモアルノデア^{フランス}ル。

公債所持人等ハ右ノ如キ事情ニ因ル法^{フランス}貨ノ下落ニ周章狼狽シ如何ニモシテ之ガ爲メ蒙ルベキ損害ヲ防止セムト反問苦肉ノ策ヲ講ジ或ハセルミナル法^{フランス}ニ因ル金法^{フランス}拂^{フランス}ガ至當ダトカ又ハ此公債ヲ以テ磅公債ノ一部ダカラ磅ニ換算シテ支拂ヘトカ又ハラテン同盟ニヨル貨幣ヲ以テ支拂ヘトカ色々ノ理窟ヲ按出シテ一九二六

年以降今日ニ至ル迄七年間ニ亘リ訴訟ハ繼續シテ居ルノデアル。
 我々ハ「經濟ハ法律ニ先行スル、隨テ法律ハ一定ノ經濟事情ノ所産デアアル」トイフ輓
 近學者ノ法理論ヲ顧ミザルモノデモナク況ンヤ法律ガ社會事情ノ變遷ニ伴ヒ改
 廢進化セラルヘキモノナルコトヲ否ムモノデハナイ、併シ乍ラ既存ノ法則ニ依ツ
 テ成立シタ法律行爲ガ當事者一方ノ經濟的事情ハ變化ニ依テ何等特約ナキニ拘
 ラズ根底ヨリ覆ヘサル、ガ如キコトアラバ契約ノ自由就中國際間ノ取引ノ安全
 ハ何ヲ以テカ之ヲ期待シ得ラルルデアラウ、我々ハ斯ル訴訟ガ人權宣言ノ布告者
 デアリ近代法律學ノ先覺者トシテ尊敬スル佛國所持人ニヨリ提起セラレタル事
 實ヲ寧ロ悲シムモノデアアル。
 本件訴訟ノ動機既ニ斯ノ如ク不純デアアル、其理由ノ正シカルベキ筋ハ毛頭有リ得
 ナイノデアアル、併シ乍ラ正邪時ニ其歸趨ヲ謬ラザルコトナキヲ保シ難イ、
 以下暫ク兩者主張ノ理非曲直ヲ検討セラレムコトヲ望ム。

第三款 當事者双方ノ主張

第一項 佛國債券所持人側ノ主張

(A) 「ゼルミナル法」ニ依ル金法ヲ以テ支拂フヘシトノ請求

(要旨)

此主張ハ公債發行當時ノ舊法(革命曆十一年芽月法)ニ因ル金貨ノ分量ヲ以テ
 フラン 法ノ騰落ニ拘ラズ——支拂フベキコトヲ我東京市ニ要求スルモノデアアル。
 東京市公債ハ一、九二八年ノ新貨幣法第二條第二項ノ「金法」ニテ有效ニ契約セラ
 レタル國際貸借ニ屬シナイ、即チ金法拂ノ契約(金貨約款)ガナイノデアアル加之佛
 民法第一、八九五條ニハ「金錢貸借ヨリ生ズル債務ハ常ニ契約ニ表示サレタル數
 額ノ金錢ノミニ止マル、若シ支拂期以前ニ於テ貨幣價值ノ騰貴若クハ下落スル
 コトアルトキハ債務者ハソノ貸與サレタル數額ノ金錢ヲ返還スルコトヲ要ス」
 トアリテ舊法ニ依ル金法拂請求ハ不當デアアル。

此點ハ既ニ巴里控訴院テ認メテ居ルノミナラズ破毀院ニ於テモ之ヲ肯定シテ
 居ル、隨テ「ベルンシユタイン」「ルーセー」等ハ右所謂金法拂ノ要求ハ既ニ之ヲ取
 下ゲタノデアアル、尤モ今尙ホ單ニ舊法ニ因ル金法拂要求ノ訴モ殘ツテハ居ルガ

相手方ハ延期シタリ缺席シタリシテ判決ヲ避ケテ居ルノデアアル。斯ノ如ク此問題ハ現在ニ於テハモハヤ相手方主張ノ核心ヲナサザルノミナラズ却テ寧ロ此問題ニ觸レムコトヲ回避セムトシテ居ル事故此際是以上詳説スルヲ止メル。

(B)「磅公債ノ一部ナル故發行當時ノ磅ニ換算シテ支拂フヘシ」トノ請求

(要旨)

是ガ目下争訟ノ中樞ヲナシテ居ル磅換算拂ノ要求デアアル即チ本件額面五百法ノ佛貨公債ハ單一ナル英貨公債ノ一部デアアルカラ發行當時ノ磅換算額ニ基イテ支拂ヘト云フノデアアル「デイジョン」判決ハ復タ之ヲ支拂日ニ於ケル磅ト法トノ爲替相場ニ依リ法ヲ以テ支拂フベシト宣言シテ居ル。

(論據)

- (1) 東京市ハ總額九百十七萬五千磅ノ公債ヲ發行シ佛貨公債ハ其一部デアアル。
- (2) 佛國ニテ募集スル場合ハ一磅ニ付二十五法二十二參ノ割合ヲ以テ換算スト第二號條例ニ記載シアアルコト。

(3) 證券面記載ノ「一億八十八萬法ハ四百萬磅ニ等價ス」[Ecs 100, 880, 000 (Ces derniers équivallant à £ 4,000,000)]トノ文言ハ磅ニ換算シテ支拂フヘキ意思ヲ表示シタモノト見ルベキデアアル。

(4) 公債ノ擔保、減價基金等ハ佛貨公債ト英貨公債ト共通デアアル。

(5) 東京市ハ四百萬磅ニ相當スル實價ヲ取得シタノデアアルカラ磅ニ換算シタル價格ヲ支拂フガ相當デアアル。

(6) 債權者ハ平等ニ待遇セラルベシトハ債權契約ニ於ケル原則デアアル、今ヤ法ノ價值ハ低ク英米ガ磅拂ヲ受クルニ比シ甚シク不利デアリ不平等デアアル。

等ガ其ノ主タルモノデ更ニ附加的ニ、

(7) 「證券面ノ文字解釋ニ付疑義アリタル場合ハ英文々面ニ據リ解決ス」(證券面ニハ英文ト佛文トデ記載シテアル)ト券面ニ記載シテアル點カラ見テモ磅公債ト云ヘル。

(8) 證券面ニ九百十七萬五千磅ノ公債「L'empunt」ナル單數語ヲ使用シ複數語ヲ使用シテナイカラ佛公債ハ英公債ニ吸收セラルベキデアルト主張シテ居ル。

第二項 東京市ノ主張

(A) 所謂金法拂ノ要求ニ對スル不法不當ニ就テハ第一項ノ(A)ニ述ベタル事由ニ依リ今茲ニ詳説セズ

(B) 「佛貨公債ハ磅公債ノ一部ニ非ス」

(要旨)

最初東京市ガ約一億圓ノ資金ヲ要スル爲メ英國ニ於テ英貨公債ノミヲ募集セムトシタ處ガ英國ノミデハ募集困難ニナツタ折柄偶々米國及ビ佛國ニ於テモ應募者ヲ見ルニ至ツタ然ルニ佛國應募者側ハ自國ノ貨幣ニヨル法公債ノ發行ヲ要求シタルガ爲メ英貨公債ノ外特ニ市ハ佛貨公債ヲ發行シ拂込モ法ヲ以テシ償還モ法ヲ以テ爲シ來ツタモノデアアル。即チ過去十一年間佛國所持人ハ現實ニ法公債タルコトヲ自認シテ居ル佛貨公債ハ決シテ磅公債ノ一部ニ非ズ。

(論據)

(1) 市條例第一號ニハ「其一部ヲ内國債ニ變更スルコトヲ得」トアリタルヲ第二號

ニ於テハ「佛貨公債ニ變更スルコトヲ得」ト改メテアル。

(2) 市條例第三號ニハ「公債ハ英貨五百十七萬五千磅及佛貨公債一億八十八萬法トス」ト明文ヲ以テ後者ガ前者ノ一部ニ非ザル旨ヲ示シテ居ル。

(註) 此三號市條例ハ明治四十五年五月ノ決議ニシテ同年二月二十二日公債發行後ノ決議デアアル然シ乍ラ其レガ今日アルヲ豫期シテ作成シタルモノニ非ザルヤ勿論デアアルニ號條例ニ基キ二種ノ公債ノ内譯ヲ明ニシタモノデアアル

(3) 事實上英貨公債ハ英國及米國ニ於テ佛貨公債ハ佛國ニ於テ發行シテ居ル。
(4) 佛貨公債ハ額面五百法利子年額二十五法ナルニ英貨公債ハ額面二十磅百磅二百磅ノ三種トシ明カニ公債ノ種類ヲ異ニシテ居ル。

(5) 尙ホ元金及利子ノ支拂ハ總テ佛國ニ於ケルソシエテゼネラル外二銀行ニ於テ法ヲ以テ爲スベキ旨ノ約款ニシテ證券面ニモ之ヲ記載シアリ。

(6) 同證券面ニ元金利子ニ對スル佛國諸稅(印紙稅ヲ含ム)ハ元金及利子ヨリ控除シテ支拂フコトヲ規定シ、

(7) 白耳註ニ於テハ其時(支拂時)ノ巴里向爲替相場ヲ以テ佛國諸稅ヲ控除シ白

耳義法ヲ以テ支拂フコトヲ規定シ反之英貨公債ハ米國等ニ於テ支拂フ場合ハ倫敦向爲替相場ニ依ルベキコト、定メ二者ノ間儼然タル區別ガアル。

(8) 兩公債證書ノ相違ハ前記(4)ニ述べタルガ如ク隨テ證券番號ノ如キモ英貨公債ト佛貨公債トハ全然區別シ英貨公債ハ其米國市場ニ於テ發行シタルモノモ同一順位番號デアアルニ反シ佛貨公債ハ更ニ別箇ニ一番ヨリ二〇一七六〇番迄ノ番號ヲ追ヒ抽籤償還ハ巴里ソシエテゼネラルニ於テ爲スノデアアル
 反之英米ノ分ハ倫敦ニ於テ抽籤償還ヲ行フノデアアル而シテ英國及ビ米國ノ所持人ハ彼ノ磅ガ下落シタルトキニ於テモ尙且ツ何等苦情ヲ云フコトナク磅ノ計算ヲ受取ツテ居ルノデアアル本件原告ノ云フガ如ク佛國所持人ノミ損失ヲ受クルニ非ズ爲替相場ニ伴ウテ變動ガアルノデアアル殊更ニ佛國所持人ノミニ對スル債權者間ノ不平等ハ存シナイ。

(9) 法公債ノ拂込ハ證據金トシテ五百法券一枚ニ付百法ヲ支拂ヒ拂込期日ニハ殘額三百八十三法七十五參ヲ法テ拂込シテ居ルノデアアル決シテ磅ヲ拂込シテハ居ラヌノデアアル。

(10) 東京市ハ現在ニ至ル迄佛國政府ニ對シテハ抽籤ノ都度納稅スルニ現在ノ法ヲ以テシテ居ルノデアアル。

(11) 事實上、一九一六年以降十餘年間東京市ハ法ノ騰落ニ拘ラズ額面通りノ法ヲ以テ償還シ來ツタノデアアリ之ニ對シ佛國所持人側ニ於テ此ノ間何等異議ハナカツタノデアアル即チ裁判外ニ於テ彼我共ニ認メラレタル此事實ハ何物ヨリモ強力ナル證左デアアル。

(12) 右ノ如クデアアルカラ佛國ニ於ケル市場ノ相場モ亦法ヲ以テ建テラレテ居ツタノデアアル其磅相場ノ影響ヲ受クルニ至リタルハ我東京市ニ對スル訴訟及他ノ國々ニ對スル此種ノ訴訟ガ簇出シタル頃カラ後ノコトデアアル是亦佛貨公債タル實質ヲ物語ルモノデアアル。

(13) 茲ニ最モ注意スベキコトハ前記ノ如ク佛貨公債ヲ發行シ法ヲ以テ拂込ミ法ヲ以テ支拂フコト其他英貨公債トソノ取扱ヒヲ異ニスル點ニ關シテハ當初其衝ニ當リタル森財務官トソシエテゼネラル支配人ドリゾン氏トノ間ニ於テ締結セラレタル契約ニモ明記シアリ巴里控訴院判決亦現ニ之ヲ援用シテ東京市

ニ對スル判決ノ資料トナシテ居ル一事デアル其他細目ニ亙リテ點檢スレバ時
效ノ規定ノ相違及ビ公債臺帳ノ如キモ英貨公債ハ倫敦ニ佛貨公債ハ巴里ニ在
リテ各別ニ基本番號ヲ異ニシ又各別ニ抽籤ヲナス等其差違ハ實ニ枚舉ニ遑ナ
イノデアアル尙ホ序ニ債券所持人側ノ主張ヲ更ニ反駁スレバ、

(14) 總額九百十七萬五千磅ノ公債トアルハ縷述シタルガ如ク元英國ノミニ於テ
募集スル考デアツタカラ大藏省ニ英貨ノ總額ヲ以テ認可ヲ申請シタノデア
ル其後佛國募債ノコト進捗シ佛國銀行家ノ要求ニ因リ之ニ應ジテ明カニ佛貨公
債ト英貨公債トヲ區別シタノデアアルコトハ前記市條例其他各項ニ依ツテ
明カデアアル。

(15) 證券面記載ノ一億八十八萬法ハ四百萬磅ニ相當ス「トアルハ第二號條例ニ一
磅ニ付二十五法」(二十五法ニ割合ヲ以テ換算ス)ト規定シアルコトト共ニ市條例
中佛貨公債一億八十八萬法ヲ發行スルノ意ニ外ナラナイノデアアル即チ五百十
七萬五千磅ハ英貨ヲ以テ又一億八十八萬法ハ佛貨ヲ發行スル此總額ガ佛貨一
億八十八萬法ハ英貨ニ換算スレバ四百萬磅ニ相當スルガ故ニ——當時ノ一磅ハ

二十五法二十二參ナルヲ以テ合計九百十七萬五千磅デアルト云フニ過ギナイ
ソレ故ニ公債證書面記載ノ文字就中總額ト内譯トヲ示ス所謂「シヤツポー語」
「タル」(Equivalent to)ナル文字アルノ故ヲ以テ直チニ本件公債
ヲ以テ磅公債ノ一部ナリトスルハ失當デアアル。

(16) 英貨公債及ビ佛貨公債ヲ擔保スル爲ニ設定シタル擔保物及減債基金ガ兩者
ニ共通ニナツテ居ルノハ同時發行ナル此二公債ニ對シ擔保及減債基金ノ順位
差等ヲ設ケズ同格ト爲サントスル點ヨリ寧ロ當然デアツテ之ニ先タツ六年前
ニ於テ發行シタル公債ノ擔保市ノ他ノ收入ト同順位ニ置クトサヘ言ツテ居ル。
(17) 債權所持人側主張ノ(5)(6)ニ付テハ前記東京市ノ主張(8)ニ依ツテ全然理由ナ
キコト明デアアル。

【附】「デイジョン」判決ヲ評ス。

更ニ進ンデ「デイジョン」控訴院判決ニ論及シ之ガ是非ヲ批判シテ見タイト思フ。
「デイジョン」判決書ニ曰ク

(巴里控訴院判決ニ對スル分)

「一九二八年二月八日ノ「セーヌ」縣第一審裁判所ノ判決ヲ無條件ニ確認シ右判決ガ完全ナル效力ヲ發生スベキ旨判決ス。

東京市ニ對シ控訴科料並ニ巴里控訴院(但シ破毀セラレタル判決ニ關スル分ヲ除ク)及「デイジョン」控訴院ノ訴訟費用ノ支拂ヲ命ズ」

(「ブザンソン」控訴院判決ニ對スル分)

「一九三一年一月一日付破毀院ヨリノ委付事件ニ關シ本件訴訟當事者ニ對シテハ一九一二年二月二十二日ノ五歩利付公債ガ磅貨單一公債ナリトノ點ニ關スル一九二八年三月二十日ノ在「ヴズール」オート・ソーヌ」縣地方裁判所判決ヲ確認セル一九二八年十二月十二日ノ「ブザンソン」控訴院判決ニ依リ決定的ニ判決セラレタルモノト認ム之ニ反シ右判決ハ債務者ノ支拂方法ニ關スル同判決中ノ破毀セラレタル部分ニ付既判力ナク從テ當控訴院ハ此點ニ付委付ヲ受ケタル「オート・ソーヌ」縣地方裁判所ノ前顯判決ヲ審議スル權利ヲ有スルヲ以テ「ルーセル」及「ベルンシュタイン」ガ元利支拂ヲ革命曆第十一年芽月法ニ依ル金法^{フラン}ヲ以テスベシトノ自己ノ要求ヲ放棄シ且ツ自己ノ主張中ノ右部分ニ關スル訴訟ヲ取

下ゲ「オート・ソーヌ」縣地方裁判所並ニ「ブザンソン」及「デイジョン」控訴院ニ於ケル訴訟費用ヲ負擔セシメラレタシトノ兩人ノ申立ヲ受理シ依テ本訴ノ目的タル判決ヲ東京市ハ一九一二年五分利付公債ノ中佛蘭西ニ於テ募債セル部分ノ元利ヲ支拂期ニ於ケル磅相場ヲ以テ爲スベシト命ジタル點ヲ確認シ「ルーセル」及「ベルンシュタイン」ニ對シ其申立通り第一審裁判所並ニ「ブザンソン」及「デイジョン」控訴院ニ於ケル訴訟費用ノ全部ノ支拂ヲ命ジ控訴科料ハ東京市ニ於テ支拂フベシト、

(1) 此判決ガ本件公債ヲ磅ノ單一公債ナリトシテ居ル點ハ嚮ニ佛國破毀院ニ於テモ同様ノ裁決ヲナシタ所デアルガ其磅公債トナスコトノ非ナルハ前記東京市ノ主張(1)乃至(16)ニ於テ概説シタル所デアル既述ノ論據ハ移シテ以テ該判決ハ不當ヲ證スルニ十分ナノデアアルガ更ニ該判決ノ結果ヨリ演繹的ニ之ガ當否ヲ検討シテ見ヤウ。

(2) 若シ夫レ「デイジョン」判決ノ如ク磅ニ換算シ又支拂時ニ於ケル爲替相場ヲ以テ支拂フモノトセン乎私ハ茲ニ「額面不定論」ヲ高唱セザルヲ得ナイノデアアル。

何故ニ額面不定ナリト云フカ、凡ソ公債タルト社債タルト問ハズ其證券ハ常ニ特定ノ銘價ヲ表示シナケレバナラヌコト云フ迄モナイ、然ルニ今「デイジョン」判決ノ如ク此五百法^{フラン}ノ公債ヲ一磅即二十五法^{フラン}二十二參^{センチム}ノ割合デ發行當時ノ磅ニ換算スベキモノトスルナラバ、

$$500.00 \times 25.22 = 12,610.00 \dots\dots\dots$$

ト爲リ其銘價ハ確定數ニ非ザルモノトナル而シテ支拂日ニ於ケル爲替相場ニ依リ法ニ換算スルトセバ此不確定數ニ對スル何十乗カノ累數ヲ得ネバナラヌ。斯ノ如キコトガ果シテ公債發行者タル東京市ノ豫期シタ所デアラウ乎、更ニ又之ヲ以テ應募者タル一般佛國債券所持人等ノ當初有セル意思ナリト斷ジ得ヤウ乎、是レ實ニ最モ尊重スベキ兩當事者ノ意思ヲ無視シ牽強附會ノ辯ヲ以テ公債發行當時ニ於ケル當事者間ノ授受ノ意思トハ全ク懸絶セル「虛構ノ意思」「珍奇ナル公債」ヲ創造シタルモノト云フノ外ハナイノデアアル。

(註) 原告ビエール、ラアグ氏ハ自ラ獨創ノ換算率ヲ按出シ利子各一枚半磅元金各一枚二十磅ヲ要求シテ居ル計算ノ基礎ナク其不當ナルコト勿論デアアル。

世界ハ廣ク公債社債ノ種類亦多シ、然レドモ果シテ此ノ如ク奇異ナル公債ヲ他ニ求ムルヲ得ルデアラウ乎、

(3) 更ニ本公債ヲ磅公債トナスコトニ依テ生ズル今一ツノ不都合ハ裁判管轄ノ問題デアアル、即チ若シ東京市公債ヲ以テ判決ノ如ク磅單一公債ナリトスル前提ヲ取ルナラバ之ガ裁判權ハ日本ノ裁判所及ビ「行爲地」タル英國裁判所ノ管轄ニ屬スルモ佛國裁判所ニ裁判權ナキニ至ルノデハアルマイカ、此點ニ關シテハ後述第四節第一款ニ讓ル。

(註) 此等ノ點ハ「ラベ博士及ビマツス博士」ニモ卑見ヲ述ベテアル併シ「ラベ博士」ハ額面銘價ニ付テ最初換算ニ依リ確定シタルノデハナイカトノ意見ナリシ故前記ノ如ク詳述シタルニ更ニ書面ヲ求メラレタルヲ以テ私ハ更ニ書面ヲ以テ此卑見ヲ述ベテアル

以上論述シタル所ニヨリ本件公債ヲ以テ磅ノ單一公債ナリトスル判決及ビ更ニ之ヲ支拂時ニ於ケル磅ノ爲替相場ニ依リ支拂フベキ旨ノ判決ガ如何ニ誤レルカハ、最早多言ヲ要セズシテ明カデアルト信ズル。

第四款 【引例】英佛間ニ於ケル「ラント・フランセーズ」公債問題

英佛間ニ於ケル「ラント・フランセーズ」公債 (Rente Française) 磅償還請求事件ハ東京市佛貨公債事件ト其性質及種類ニ於テ殆ド一致シ本件ニ對スル有力ナル參考資料デアアル。

此事件ニ於ケル佛、蘭、西、政府ハ主張ヲ正當トスルナラバ——又正當ト思フ——我東京市ノ主張ハ當然容認セラレナケレバナラ又即チ勿論解釋ニ因ツテ必然的ニ斯ル結論ニ到達スル道理デアアル。

今此事件ノ概要ヲ述ブレバ

- (一) 佛國政府ハ大戰ノ前後ニ亘ツテ所謂國防公債ヲ發行シタ「ラント・フランセーズ」即チ是デアアル佛國ハ其内國債ニ依ルノ外英國市場ニ於テモ募債シ一九一五年ヨリ一九一八年ニ亘リ同國ニ於テ十六億四千百十萬九千百法(約五千萬磅)ノ公債ヲ募集スルコトヲ得タ。
- (二) 此公債募集當時左表ノ如キ英佛換算割合デ英國所持人ハ應募シタノデアアル。

一九一五年(五分利)	百法 ^{フラン} ニ付	三磅四志
一九一六年(〃)	〃	〃
一九一七年(四分利)	〃	二磅一〇志六片
一九一八年(〃)	五百法 ^{フラン} ニ付	一三磅一二志四片

斯クシテ公債ハ英國市場ニ於テ發行シタ分モ佛國市場發行ノ分モ同一ノ公債デアアルガ唯證券面ニ赤字デ (Subscription Anglaise British issue) 及 (Four Shillings) ノ印アリ單ニ之ニ依テ英國ニテ募債シタルコトヲ記シテ區別シテアツタノデアアル。

(三) 一九三一年一月(東京市佛貨公債事件ニ付破毀院判決アリタル當時)ハ第一回ノ償還期ニ到達シタノデアアル、ソコデ英國政府ハ自國所持人ハ爲メニ法ハ暴落ニ因リ蒙ル損害ヲ防止セムガ爲メ應募當時ノ英佛兩貨ノ換算割合ニ因リ償還スベキ旨要求シタノデアアル。

(註) 當時ハ勿論佛國ガ一九二八年平貨切下(一磅ニ付百二十四法^{フラン}ニ參^{ヤンチム}ノ割合ヲ行ツタ後デアアル

(四) 英國政府ト佛國政府トノ間ニ於テハ双方ヨリ文書ヲ以テ交渉ガ行ハレタガ結局佛國ハ此要求ヲ拒否シタ、今其主張ノ要旨ヲ見ルニ、

(英國側)

1. 本公債ハ當時對獨戰爭ノ爲メ國歩艱難ナル状態ニ在ツタ佛國ヲ救ツテ、彼等ニ勝利ヲ得サセヤウトシタ英國人ノ熱望ニ依ツテ應募サレタ戰時公債デアツテ之ヲ普通ノ商業投資ト同視スベキデナイ。
2. 佛公債ハタトヒ法ヲ以テ明示セラレテ居ルトシテモ、ソレハ磅應募ノタメニ英國立銀行ニ依テ發行セラレタモノデアリ、而シテ佛國政府ガ實際受領セル貨幣モ磅デアツタ次第デアル。
3. 佛公債ノ佛所持人ニ對シテハ佛市民タルノ故ヲ以テ法低落ニヨツテ蒙ル損害ヲ考慮シテ生活費ノ減少及當然負フベキ納稅義務ノ輕減等ノ形式デ若干ノ賠償ヲ得タルニ反シ同ジク佛公債ノ英所持人ニ對シテハ何等救濟セラレズ法ノ低落ハ唯損失ノ因タルニ過ギナカッタノデアル。
4. 佛政府自ラ多クノ場合ニ於テ、法ニテ同政府ニ對シ負擔シタル債務ハ法債務トシテ取扱ハルベキモノデハナクテ外國通貨、即チ該債務契約當時ノ爲替率ニ基キ金貨ニテ計算セラレルノガ至當デアルト主張シテ居ル。

5. 佛政府ハ「ギリシア」「ルーマニア」及「ユーゴスラヴィア」ノ對佛戰債取極メ交渉ニ際シ、ソレ等ノ債務ニ對スル債券ガ佛法ヲ以テ指示サレシニ拘ハラズ、聯合王國ニ於テ發行セラレシ佛公債ト同様ニ同負債ノ額面總額ハ之ヲ金法ニテ支拂フノガ債務者政府タル者ノ契約義務デアルトイフ見地ニ立脚シテ計算セラレネバナラヌト主張シタ。
6. 佛國政府ハ他國ニ對スル要求ニ關シテ自ラ呈示シタ原則ヲ、佛蘭西ノ債務ガ問題ニナツタ場合ニハ適用出來ナイナドト云フヤウナ遁辭ヲ以テ佛公債ノ英國投資者ニ對スル論據トスルコトハ困難デアラウ。

(佛國側)

1. 公債發行當時聯合國側ノ諸國ガ殆ド全部達着シテ居タ經濟的困難ニ關シ佛蘭西ヲ援助セントスル英國民ノ熱意ニ因ツテ、或ル種ノ危險ヲ伴フベキヲ豫期シテ強制相場制度ノ貨幣ヲ以テ發行サレタ、此戰時公債ニ應募サレ、以テ聯合軍ノ勝利ヲ導カントサレタコトハ英政府同様我共和國政府モ信ジテ疑ハヌ所デアル。

2. 佛政府ガ倫敦ニ於テ發行シタル佛公債ト佛國內ニ於テ發行シタル佛公債トヲ常ニ同一視シテ來タ理由ニ對シ、英政府ハ其覺書ノ何處ニモ法理的見地ニ因ル何等ノ異議ヲモ速ベテ居ナイ、特ニ英政府ハ倫敦發行ノ公債ガ金法支拂トカ金價值ノ或ル本位ノ採用トカ云フコトニ關シ何等ノ約定モ表示サレタルコトナク專ラ法ニテ作成セラレタルモノデアアルコトヲ快ク承認シテ吳レテ居ル。

3. 法低落ハ對國家或ハ對會社又ハ對個人ノモノナルニセヨ、凡有ル彼等ノ債權價值ヲ侵害シタノデアアル、是レ法低落ガ幾多ノ傷マシキ社會變化ヲ惹起シタ所以デアアルガ之ニ就テハ喋々スル迄モナク周知ノコトデアアラウ。

4. 更ニ共和國政府ガ希臘、ルーマニア及「ユーゴスラヴィア」ニ對シ三國ノ戰債ヲ當初、金支拂スベキ様主張シタコトニ付テハ、特ニ此等債務ガ英佛兩國ノ共同貸付ヨリ生ジタルモノデアアルコトハ英政府モ既ニ承知セララル筈デアアル、且又、「ヘーグ」ノ二會議中ニ上記三國ト決定的協約ヲ結ブニ際シ共和國政府ハ實際上此主張ヲバ放棄シタノデアアル。

トアリ、斯クテ佛國ハ英國ガ之ヲ仲裁裁判ニ付セント提議シタルニ對シテモ、先ヅ

以テ英政府ガ英國ノ債券所持人ノ有スル債權評價ノ問題ノミヲ仲裁裁判ニ付セントスルコトヲ失當ナリトシ更ニ佛國憲法ニ依レバ仲裁裁判ハ國庫ノ豫算ニ關スル事事故、承認ニ先立ツテ先ヅ佛國議會ノ承認ヲ要スルガ議會ハ斯ル承認ヲ與ヘヌデアラウト婉曲ニ否認、理論的ニ之ヲ拒絕シタノデアアル。

(五) 思フニ磅デ拂込マシメタ點證券ハ共通ナルモ特別ナル區別ノ表徵アル點等佛國側ニ弱點アルハ否ミ難キモ、大體ニ於テ佛國側ノ主張ハ認メネバナラヌ、併シ乍ラ英國所持人モ未ダ全ク承服ハセズ佛政府ハ「ラント」(年金)ノ性質ヨリスル乎、將又此争ヒノ緩和ヲ待ツ乎、兎モ角利子ノミヲ現在ノ法ニテ支拂ヒ證券ヲ書換ヘテ居ルノデアアル。

(六) 英國側ノ主張ハ發行當時ノ磅ニ換算シ且金法拂ノ要求ヲ爲セルモノト見ルベキデアアルガ此主張ハ東京市ニ對スル佛國所持人ノ主張ヨリハ稍強キ根據ヲ有スルモ結局法公債ノ本質ヲ變更スベキ論據ハナイノデアアル、即チ理論上佛國側ノ主張ヲ認メネバナラヌノデアアル、既ニ佛國政府ニシテ自己ノ主張ヲ正當ト信ズルナラバヨリ強キ理由アル我東京市ノ主張ノ正當ナルコトヲ認容シ所持

人等ヲ諭シテ吳レル可キデハアルマイ乎。

嗚呼孰レガ正孰レガ邪暫ク識者ノ判斷ニ俟ツ。

(附記)

昭和五年(一九三〇年十一月)「アノ」(天人ノ經營スル)「フォオルス」(新聞ニ於テ東京市ニ同情スル)ガ如キ記事アリタルニ對シ「アミ、デユ、ブローアル」(化粧品商コテイ氏經營)ハ之ヲ評シテ英國側ガ佛國側ニ要求シタルハ金法ノ觀念ナカリシ時代ニ契約シタルニ拘ラズ金法ヲ以テ要求スルモノデ不當テアル、東京市ノ分ハ之ニ反シテ居ル、ト評シテ居ル、實ニ勝手ナル議論デアアル、東京市ノ公債發行ハ、一九一二年デアアル、一九一五年以降發行ノ「ラント、フランセーズ」ニ於テ豫見セザリシモノヲ三年前ニ於テハ豫見セリト云フナラバ其ハ明白ナル論理ノ矛盾デアアル。

第二節 契約解除請求事件 (派生事件ノ一)

本件ハ「ドジャン」トイフ債券所持人カラ東京市ノ義務不履行ヲ原因トシテ公債發行契約ヲ解除シ且市ハ期限ノ利益ヲ失ヒ一時ニ支拂フベシト云フ要求デアアル(他ニモ同趣旨ノ事件ガアル)本件ニ就テハ

(一)公債發行行爲ハ東京市ナル自治團體ノ行政法上ノ財政的行爲デアアルガ故ニ民法契約解除ノ適用ヲ受クベキモノニ非ズト考ヘラレル乍併此點ニ付テハ佛國裁判所ハ他國ノ自治團體ナルガ故ニ個人ト同一視スルノ見解ヲ取ルモノ、如ク佛民法第十四條ニ依リ當然管轄權アリ又民法ノ適用アリト爲スモノ、如クデアアル此管轄問題ハ「ド」ノ事件ニモ共通デアアルカラ次ニ讓ル。

(二)佛民法ノ適用アル行爲ナリトスルモ公債發行行爲ハ片務契約デアツテ双務契約デハナイ故ニ義務不履行ニ因ル契約解除ノ適用ヲ受クベキモノデハナイト信ズル。

此點ニ關スル佛國裁判所ノ判例ハ二ツニ岐レテ居ル、即チ「ダジャン」裁判所ハ「公債發行契約ハ片務契約ナルガ故ニ双務契約解除ノ適用ハナイ」ト判決シ(Jugement du Tribunal d'Agen 2 Juin 1,905-Recueil des Pandectes Françaises, année 1,907, 2ème partie, Page 212)一方セーヌ民事裁判所ハ之ヲ「双務契約ナリト解シ契約解除ノ適用アリ」トシテ居ル(Jugement du Tribunal de la Seine—Dalloz année 1,929, 2ème partie, Page 141) Affaire Ville du Bahin.



(此參考判例ハ「マツス博士ノ秘書ビルティエール」氏ノ調査シタルモノデ他ニモ同様ノ判例ハアルノデアアル。

(三) 今百歩ヲ譲リセーヌ裁判所ノ判例ニ從フトセン乎、
「我東京市ニ義務不履行アリヤ」

ノ問題ヲ生ズル。東京市ハ一九二八年以來支拂ヲ爲サヌト原告ハ主張シテ居ルガ決シテ然ラズ。支拂準備ハ常ニ調ヘテ居ルノデアツテ東京市ノ主張スル法拂ナラバ何時ニテモ支拂要求ニ應ズルシ又從來トテモ法ノ騰貴スルト下落スルトニ拘ラズ其支拂ヲ怠ツテハ居ナカッタノデアアル。現在ニ於テモ東京市ハ巴里ニ於テ抽籤モスレバ佛國政府ニ對スル納稅モ從來通り續ケテ居ルノデアアル。然ラバ即チ今尙係争中デアル磅公債ノ一部トシテノ支拂ヲ要求スルモノニ對シテ東京市ガ之ニ應ゼザルハ寧ろ理ノ當然デアツテ其義務不履行アリト爲スコトノ當ラザルヤ明カデアアル(此點ニ關シ詳論スベキコト多キモ今茲ニハ要點ノミニ止メル)。

(四) 佛民法第一、一八四條ニ依レバ「双務契約ニ於ケル當事者ノ一方ガ契約ヲ履行

セザル場合ニ於テハ相手方ハ其契約ノ解除ヲ請求スルコトヲ得但シ此場合ニ於テハ契約ハ當然解除セララルコトナシ。契約ノ履行ヲ受ケザル當事者ノ一方ハ其契約ニシテ履行可能ナル場合ニハ其履行ヲ強制スルカ又ハ契約ヲ解除シ損害賠償ヲ請求スルカ何レカ一方ヲ選擇スルコトヲ得又契約ノ解除ハ裁判所ニ請求スベキモノトス。裁判所ハ事情ニ依リ債務者ニ對シ相當ノ猶豫期間ヲ許可スルコトアルベシ」トアリ。我民法第五四一條ト異リ契約ノ解除ハ必ズ裁判所ニ請求ス可ク裁判所ハ猶豫期間マデモ附シ得ルノデアアル。而シテ原告ハ磅拂又ハ金法拂請求ノ訴ニ附加シテ契約解除ノ請求ヲシテ居ルノデアアル。若シ原告等ニシテ現時ノ法ヲ以テ請求スルモノナラバ是レ即チ東京市ノ主張スル支拂ニ應ズルモノデアツテ問題ニハナラヌノデアアル。原告ノ請求スルモノハ磅公債ノ一部トシテ磅換算拂ノ請求デアリ從ツテ我東京市ハ之ヲ拒否シテ争ヒツ、アルノデアアルカラ此實體上ノ問題力確定サレザル以上ハ我東京市ニ義務不履行アリヤ否ヤハ決定スルコトハ出來ヌ道理デアアル。

(五) 尙ホ磅換算拂ノ請求ノ當否ガ確定スル迄該契約解除事件ヲ中止スベキヤ否

ヤノ問題ヲモ生ズルノデアアル。

(註) 此點ニ付「マツス博士及ル、コワント博士東京市側代訟人」ハ必ズ中止スベシトノ意見ヲ有セズ
事件ハ中止申請ハセズ再度延期トナツテ居ルノデアアル。

第三節 差押異議事件 (派生事件ノ二)

(一)

東京市ガ在巴里、ソシエテ・ゼネラルニ寄託セル千百餘萬法ハ訴訟提起以來幾人モノ佛國債券所持人ニ依ツテ假差押ヲ受ケテ今ヤ餘ス所ガナイ、併シ東京市ハ公理正論ノ示ス所ナラバ其多寡ニ拘ラズ其支拂ヲモ躊躇スルモノデハナイノデアアル。隨テ市トシテハ此寄託金ノ差押ニ對シテモ別段假差押異議等ノ手續ハ取ツテ居ラナイノデアアル、勿論「ラベ」マツス兩博士等モ之ニ對スル異議ハ無用デアルトノ見解デアツタ。

(二)

事情斯ノ如クニシテ最近ニ及ンデ居タ處、一九三二年(昭和七年)一月十九日「ボルタ

リエナル者ハ假差押債權者ノ一人ニシテ「デイジョン」控訴院ニ於テ勝訴シタル「ボ
ノ」等ノ爲メニ佛民法第一、一六六條ノ間接訴權ト佛民法五六七條トニ依リ突
如トシテ「ボノ」等ノ差押債權中五百六十萬法ヲ「モンド・マルサン」裁判所ノ任命セ
ル管財人(又ハ供託官)ニ保管ヲ移スベキ旨ノ命令ヲ得タノデアアル。「マツス」博士等ハ
之ニ依テ「ボルタリエ」「ボノ」等ハ優先權ヲ取得スルコトニナルトノ見解デアアル。
「マツス」博士及「ル・コワント」博士ハ共ニ此命令ヲ違法ナリトシ民法間接訴權ノ規定
ヲ惡用セル不正行爲デアルト斷ジ其後「ラベ」博士並ニ「メーゾニエ」博士(「ボ」控訴院
ニ於ケル代訟人)共ニ同意見ヲ主張スルニ至ツタノデ更ニ幾度カ考究ノ末市ノ立
場ヨリシテ斷乎之ヲ法廷ニ爭フニ決シタノデアアル。此異議ニ對スル裁判ハ本年六
月「ボ」控訴院「ロ」市ハ佛蘭西ト西班牙トノ國境ニ在ル」デ行ハレタ本件ニ對スル
東京市ノ主張ハ

- (1) 「ボルタリエ」「ガ」「ボノ」ノ爲メニ優先權ヲ得ムトスルハ不當デアアル。
- (2) 而シテ此命令申請ハ佛民法一、一六六條ノ惡用デアアル。
- (3) 又佛國債券所持人就中假差押債權者ハ平等ニ待遇サルベキデ特定人ニ優先

權ヲ與フル事自體不當デアル。

四〇

此點ニ付テハ「マツス」博士ノ「コンクリューション」ニ單ニ債券所持人トアツタノヲ私ハ誤解ヲ避ケル爲メ佛國債券所持人ト改メシコトヲ要求シ「マツス」博士又快ク之ヲ容レタノデアアル。

(4) 更ニ管轄違ノ抗辯ヲ提出シテハ如何ト諮ツタトコロ「マツス」博士ハ從來ノ例モアリ此點ハ裁判所ハ認メヌカモ知レヌガ佛國內到ル處ニ訴ヲ起シ一々之ニ應訴シナケレバナラヌトアツテハ餘リ酷イト云フ譯デ之モ抗辯ノ一トシテ提出シテ吳レタ(裁判管轄ノ項參照)

(三)

裁判ハ控訴院長イエリー氏自ラ裁判長ト爲リ東京市側ハ「マツス」博士デ「セーヌ」民事裁判所ノ選任シタル管財人「ムーラン」氏モ東京市側ニ參加シタ、一方債權者側辯護士ハ「ベラール」氏(前司法大臣)デアツタ。

扱テ愈裁判ガ開始サレルト驚イタ、ソレハ裁判長ノ態度ト裁判ノ結果ガ實ニ意外デアツタノデアアル、事件ハ單ナル法理論ヲ以テ争フ可ク辯護士自ラ若クハ代訟人ノ作成セル「コンクリューション」(辯論要旨)ニ基キ辯論ハ始メラレタノデアアル、先

ヅ「マツス」博士ガ辯論スル、裁判長ハ「C'est ça」ト屢之ニ對シ相槌ヲ打ツ、一寸奇異ナ感ジガシタ、我國ハ固ヨリ是迄巴里ノ法廷等デモ見受ケヌ圖デアツタカラデアアル、次デ相手方「ベラール」氏ガ辯論ヲ始メルト裁判長ハ初ノ中ハ前同様「C'est ça」ト繰返シテ居タガ辯論ガ進ンデ日支事變ニ言及シ就中上海事件、ジュネーブ聯盟會議等ヲ引用シテ日本側ノ讓歩ヲ要求スルニ及ブヤ我々ハ私カニ彼國一流ノ辯護士「ベラール」氏モ之ハ少々脱線ダナト思ツテ居ルト物ハ觀ル人ノ心々ニ映ルノカ意外ニモ裁判長ハ同感ニ堪ヘヌモノ、如ク兩手ヲシキリニ伸縮サセツ、表情タツブリト「Tres bien」ト連呼シ出シタノデアアル——我國ニ於ケル法廷審理ガ情理兼ネ備ヘタ中ニモソノ公正ト威嚴ヲ儼トシテ失ハヌノニ慣レテ居タ私ハ此様ヲ見テ洵ニ啞然タラザルヲ得ナカツタノデアアル、唯此時陪席諸公ヤ立會檢事ガ依然トシテ威容ヲ整ヘテ居タノガ聊カ以テ慰ムルニ足リタノデアアル、更ニ又「マツス」博士ガ相手方ヲ三百的行爲ナリト喝破スルヤ當事者席ニ在ツタ「ポルタリエ」等ハ座ニ堪ヘヌモノ、如ク自ラ判例集(?)ヲ繰イテ居タガ聽テ立上ツテ不羈ニモ大家「ベラール」氏ニ或個處ヲ指示シテ連リニ何事カ私語シツ、アルヲ見流石

四一

「大事件師ノ一味」タルノ本性ヲ曝露シタルモノト、言ヒ知レヌ不快ノ感ニ打タレタノデアアル。

判決ハ「ボルタリエ」ガ「ボノー」ノ差押ノ目的物ヲ分離(移管)シタルコトヲ是認シタ、其理由ノ一節ニ曰ク

「東京市ノ態度ハ「デイジョン」控訴院判決ノ義務ヲ忌避スルモノニシテ同市ニ支拂ヲ強制スル上ニ於テ「ボノー」ノ差押ハ至當ナリ、」債權者ガ民法第一、一六六條ヲ援用シ得ベキコトハ明白ナルヲ以テ「ボノー」ノ差押ヲ「ボルタリエ」ガ分離固定シタルコトハ當然ノ事理ニシテ眞ノ意味ニ於テ右行爲ノ結果債權者間ニ特惠的地位ヲ形成シタリト云フヲ得ズ」

ト併シ特惠的地位ヲ形成セズト云フコトハ我東京市ニ利アツテ害ナキ譯デアアル右判決要旨ハ「メーゾニエ」氏ノ拔萃ニヨルモノデ未ダ正式ノ判決送達ナク且又送達後十个月ノ期間モアルコト故、上訴手續ハマダ取ツテ居ナイノデアアル。私ガ曩キニ實體上ノ事件ヲ速ブルニ當ツテ正邪必ズシモ其歸趨ヲ謬ラザルナキヲ保セヌト言ツタノハ此ノ如キ事案モアルカラデアアル。

第四節 其他ノ諸問題

第一款 裁判管轄ト準據法ノ問題

(一) 裁判管轄

本件ハ國際私法上幾多ノ論題ヲ提供スル案件デアルト思フ。

一、九二六年最初ノ訴訟ガ提起セラレタ當時ニ於テ市ハ之ニ對シ應訴スベキヤ否ヤニ付キ苦慮シテ居ル、併シ元來此法公債ハ佛國ニ於テ募債シタルモノ故佛國ハ所謂行爲地デアリ且ツ支拂場所トシテ義務履行地デアアル、又事件ノ内容ハ曲彼ニ在ルコト明カナルガ爲東京市ハ堂々進ンデ之ト争フベク意嚮ヲ決シ斷乎應訴シタノデアアル當時意見ヲ徵シタル我國學者ノ多數意見モソコニ在ツタ様デアアル。今此問題ニ關スル一、二ノ點ヲ述ブレバ

一、日本ニ裁判權アリ

世界的通則ナル「債務者住所地」ノ原則ニ從ヘバ日本ニ裁判管轄權アルコトハ當然

ニシテ之ニ對シテハ法理上彼我異論ナキモノ、如クデアアル此點ハ東京市側ノ佛國辯護士モ同意見デアアル。

二、佛國ニ裁判權アリヤ

(1) 佛國裁判所ハ佛國民法一四條ニ依リ管轄權佛國ニアリト爲スモノ、如クデアアル東京市側ノ佛國辯護士モ斯ク解シテ居ル併シ乍ラ佛民法一四條(註)ハ外國人ハ佛國內ニ住所又ハ居所ヲ有セザル場合ニ於テモ外國人ハ佛國人ト佛國內ニ於テ締結セル契約上ノ義務ノ履行ニ關シテ佛國裁判所ニ出頭ヲ命ズルコトヲ得外國人ガ佛國人ニ對シ外國ニ於テ締結セル契約上ノ義務ノ履行ニ付亦同ジト云フ自主的排他的立法デアアル之ヲ以テ直チニ本件ノ如キ國際的事件ニ應用シテ佛國ノ主權ノ下ニ在ラザル他國民ニソノ適用ヲ強ヒルノハ公正ナル法ノ運用デアアルトハ云ヒ得ナイノデアアル。

(註) 極端ナル時代錯誤的立法デ此適用ニ基ク佛國裁判權ノ判決ニ對スル諸外國ノ容赦ナキ執行判決ノ拒否ガ至當ニシテ普通ナルコトハ佛國ノ權威アル學說モ承認スル所デアアル(杉山博士意見書九八頁)

(2) 併シ乍ラ前述ノ如ク我國ハ佛國巴里市ニ於テ公債ヲ發行シ又同市ソシエテゼネラル等ヲシテ公債ノ支拂ヲ擔當セシメテ居ル即チ佛國ハ義務履行地トナツテ居ル此點ニ於テ東京市ハ佛國裁判所ニ管轄權アルコトヲ爭ハズ應訴シタノデアアル東京市ハ一面復々前述國際的通則ニ依リ債務者ノ住所地即チ普通裁判籍アル東京ニ於テモ勿論應訴シテ居ルノデアアル。

(3) 佛國裁判所ハ本件公債ヲ以テ英京倫敦ニ於テ發行シタル磅ノ單一公債ナリト斷ジ其支拂ハ發行當時ノ磅ニ換算シ更ニ之ヲ現時ノ法ニ換算シテ爲サル可キ公債ナリト斷定ヲ下シテ居ルノデアアル(巴里控訴院判決ヲ除キ)

斯ノ如ク解セン乎佛國裁判所ノ管轄權ノ基本タルヘキ事實ヲ彼、自、否、認、スルモノト云フベキデアアルマイカ佛國裁判所ガ英國ニ於テ東京市ガ發行セル磅單一公債ナリトシ而モ其内容ニ立入ツテ判斷スルハ佛國民法第十四條ニ依ルモノデアアラウ併シナガラ此場合ニ於テハ涉外法上先ヅ同法條ガ適用セラルベキヤ否ヤガ先決問題トナルノデアアルマイ乎今迄東京市ハ實體上ノ事件ニ付キ管轄ヲ爭ウテハ居ナイ、若シ磅ノ單一公債ナリトスルナラバ宜シク英國裁判

所若クハ普通裁判籍タル日本裁判所ノ判斷ニ委スベキガ公正デアアルマイ乎、

(註) 別項記載ノ「ボ」控訴院ニ於ケル差押異議事件(モン、D、マルサン裁判所ノ命令ニ對スル異議ニ

於テ管轄違ノ抗辯ヲ「マツス」博士ニ依テ提出シタ

此管轄違ノ抗辯ハ前項ニ於ケル程廣イ意味デナク「東京市ハ佛國ニ住所ヲ有シナイ、又支拂
行爲其他ノ代理行爲ハ巴里ソシエテ、セネラルニ於テ行ツテ居ル、此點ニ於テ巴里以外ノ「モン、
D、マルサン」(佛ト西トノ國境ニ近シ)ハ管轄權ヲ有セズ」トイフ趣旨デアツタ、「ボ」控訴院ハ
之ヲモ認メナカッタノデアアル、差押債權者ノ住所ガアルカラト云フ理由デ佛民法一四條ニ依
リ此抗辯ヲ排斥シタラシイ、併シ未ダ判決ノ送達ニ接シテ居ナイコト、テ此點ハ今茲ニ適確
ニ言明出來ナイノデアアル。

(二) 準據法

準據法ニ付テハ公債發行者タル東京市ガ當然適用ヲ受ク可キ法律即チ日本ノ法
律ニ據ルベシト云ヒ或ハ佛國法ニ據ル可シト云ヒ或ハ英國法ニ據ルベシト云ヒ
學者ノ間ニハ議論ガアルヤウデアアル。

併シ乍ラ曩ニモ述べタルガ如ク今本件ノ中樞タリ核心タル問題ハ本件公債ガ磅
公債ナリヤ法公債ナリヤノ事實ノ認定ニ存シテ居ル、隨テ約款ノ記載ト約款ノ由

テ生ジタル當事者ノ意思解釋ニ依リ定マル可ク今直ニ準據法ノ如何ニ依ツテ差
異ヲ生ズルトハ思ハレナイ、殊ニ佛國ニ於テモ成程之ヲ法公債ニ非ズシテ磅公債
ナリトスル判決ハアツタガ其レハ本件自體ニ就テノ判決デアリ未ダ判例トシテ
固定的ノモノトナツテハ居ナイノデアアル。

本件公債ガ磅公債ナリヤ法公債ナリヤニ付テハ日、佛、英共ニ據ル可キ法規ハナイ
ノデアアル、而シテ慣習法モナイノデアアル、既ニ明文ナク慣習法ナシトセバ條理ニ依
テ之ヲ決セネバナラヌ條理ハ社會正義ノ觀念ニ胚胎シ又之ヨリ流出スル而シテ
社會正義ノ觀念ハ國ニ依リ異ナルコトガアリ得ル、隨テ條理ニ依ツテ之ヲ決スル
モ準據法ノ如何ニ因リ差異ヲ生ズルコトハ理論上想像スルコトヲ得ルノデアアル。
然シナガラ本件ノ如ク公債ノ種類ガ磅ナリヤ法ナリヤノ事實認定ノ問題及ビ其
甄別ノ資料タル事項ニ付テハ所謂社會正義ノ觀念ヲ異ニス可クモアラズ隨テ條
理上相異ナルコトアリトモ思ハレヌノデアアル、否寧ロ此磅公債ト法公債トノ異同
ヲ甄別スベキ共通ノ理論的法則ガ日(發行者タル東京市所在地)、佛(法公債發行地)、
英(同時發行ノ磅公債發行地)三國間ニ國境ヲ超越シテ存シナケレバナラヌ道理デ

アル所謂統一的(敢テ統一法ト謂フニ非ズ)ニ條理ニ據ツテ、三國共通ニ判別ノ規矩ガアリ準繩ガナクテハナラヌト私ハ考ヘル。

(註) 統一法ハ多クノ場合ハ世界ニ於ケル多數ノ國家ノ間ニ共通ノ内容ヲ有スル法ヲ意味スルガ
單ニ二三ノ國ノ共通ノ内容ヲ有スル法モ亦其等ノ國ニ取ツテハ統一法テアル、加之此ノ觀念
ハ矢張國家の見地ヲ離レザルモノデアアル(田中博士世界法ノ理論二八三頁)

彼ノ所謂金法拂ノ請求ノ如キ案件ニ付テハ一國ノ貨幣法、民法等ノ規定ヲ直接適用セラルベキガ故ニ準據法ヲ定ムルコトノ實益ハ寧ロ此種ノ案件ニ付テヨリ多ク存スルモ今ヤ此種ノ事件ハ係争ノ核心ヲ離レテ居ルコト、前第一節ニ述ベタ通りデアアル隨テ現ニ係争ノ中核ヲ成ス所ノ磅公債ナリヤ法公債ナリヤノ事實認定ノ問題ニ付テハ前段述べタル如ク條理ニ據テ決定セラルベク準據法ノ如何ハ比較的重キヲ成サヌト思フ。

遮莫順序トシテ準據法ヲ如何ニ定ムベキ乎ニ付テ討究センニ本件公債ニ付テハ準據法ニ就テ何等明示スル所ナク、所謂當事者ノ意思ガ分明ナラザル場合ニ該ルカラ行爲地法ニ依ル可キデアアル(日本法例七條二項等)

(註) 伊國法例第九條第二項、奧國民法第三六條第三七條、波蘭國際私法第七條乃至第九條等ハ此主義ヲ明言シ佛蘭西、白耳義、和蘭、西班牙及ビ英、米、等諸國ニ於ケル判例及ビ學說モ亦此主義ヲ採ルモノデアアル(山田博士國際私法第二分冊五四八頁)

然ラバ行爲地ハ何處ナリヤノ問題ヲ生ズル我法例第九條第二項ニ依レバ契約ノ成立及ビ效力ニ付テハ申込ノ通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス^ト規定シアリ。而シテ本件佛貨公債ハ佛國ニ於テ發行募債シタルモノ即チ證券ノ申込及拂込ヲ受ケタルモノナルガ故ニ佛國ガ行爲地ニシテ隨テ佛國法ニ準據ス可キモノト謂フコトヲ得ル、又觀點ヲ變ヘテ本件公債ヲ見ルニ其基本タル契約ハ當時日本ニ在ル東京市長ト佛國巴里^ソシエテ、ゼネラル^ノ支配人^{ドリ}ゾン^氏トノ間ニ締結セラレ該契約ニ基キ公債ハ發行セラレ公債證書面ニモ兩者ノ署名ガ爲サレテ居ルノデアアル(但公債證券其者ノ署名ハ佛國側ハ他ノ代表者ノ署名セルモノモアル)故ニ此契約ヲ基本トシ發信主義ヲ取ルトキハ日本ガ行爲地ナルガ故ニ日本ノ法律ニ準據スベシト云フ結論ニモ到達スルノデアアル併シ乍ラ公債發行ノ如キハ民事法上ヨリ見レバ契約——附合契約デアアルガ一面一國主權ノ行政行爲ヲ要件トスル行爲デアアルカラ單ニ發信主義ヲ取り行

爲地法ニ依ルト簡單ニ片附ケル譯ニモ行カナイノデアアル。
 國際司法裁判所ニ於テ佛國對伯刺西及「ユーゴスラヴィア」ノ公債事件ニ付テ各債
 務國ノ法律ニ依ル可キモノトシタノハ各當事者ノ一方ガ國家デアアル點ニ重キヲ
 置イタノデアアラウガ、我東京市ハ自治團體デアアルカラ其間區別ガアルト思フ、併シ
 一國ノ公共團體デアリ隨テ其行爲——公債發行ニ付テハ監督官廳ノ認可ヲ必要
 トスル點ニ於テ單ナル個人ノ貸借關係トハ異ナルデアアル、隨テ市會ノ條例設定
 ノ決議之ニ對スル監督官廳ノ認可又其條例ノ解釋、市長ノ權限、延テ公債發行者ト
 シテノ東京市ノ意思ノ解釋等ハ日本法ニ準據シテ爲サル可ク應募者トノ契約ノ
 效力及其支拂様式等ニ付テハ佛國法ニ準據スベキモノト考ヘル。
 固ヨリ一法律行爲ニ就テハ一準據法ヲ通例トスルデアラウガ、本件公債發行ノ如
 キハ前述ノ如ク單ナル私法上ノ契約ト異ナリ其債務者側ニ取ツテハ主權ノ直接
 若クハ間接ナル行爲ガ加ハツテ居ルカラ斯ル結論モ亦已ムヲ得ヌ道理デアアル。
 茲ニ又英國法ニ準據シ佛國法及日本法ヲ以テ之ヲ制限スベシトノ有力ナル學者
 ノ説ガアル、英國ト日本トノ文化的、經濟的關係ノ密接延テハ公債發行者ガ英國的

技術ヲ用ヒ英法ヲ背景トシテ證券ヲ作成シタルコト、疑義アルトキハ英文面ニ依
 テ決スルトアルコト、佛文面ハ英文面ノ翻譯デアアルコト、約款第十二條相續ニ關ス
 ル規定等ヲ理由トシ英法ニ據ル暗黙ノ意思ガ證券自體ニ含マレテ居ルトスルモ
 ノデアアル、只私カニ思フ此契約締結當時日佛當事者双方若クハ一方ニ於テ第三國
 タル英國法ノ支配ヲ受クルノ意思ハナカツタノデアアルマイカト。
 併シ準據法ニ就テ日佛英何レヲ主張スルニセヨ又併用論ニセヨ我國學者ノ意見
 ハ大概本件佛貨公債ハ磅公債ニ非ズシテ法公債ナリトスル點ニ於テ一致セルハ
 我東京市ノ大ニ意ヲ強ウスル所デアアル。
 今實際上ニ於テハ佛國ニ於テ佛國法ニ準據シテ裁判ヲ受ケツ、アリ、又日本ノ裁
 判所ニ於テモ別ニ此點ニ就テハ何等異議ヲ止メズシテ事件ハ進行シツ、アルノ
 デアルガ前述セル如ク少クトモ日本ニ於テハ日本ノ法律ニ準據シ且佛國法ノ制
 限ヲ受ク可キモノト思フ。

第二款 佛國裁判ノ國際的效力ト強制執行

一、佛國裁判所ノ判決ハ我東京市ニ對シテ直チニ執行力アリヤ是ハ謂フ迄モナク執行力ハナイノデアアル、少クトモ日本ニ於テ執行判決ヲ受ケネバナラヌノデアアル。

(註) 此點ニ付マツス博士モ佛國判決ハ矢張り他ノ國家内ニ於ケル執行力ハナイカラ所持人ノ勝訴判決確定スルコトアルモ日本ニ於テ更ニ裁判ヲ受ケネバナラヌト云ツテ居ル。

二、日本ニ於テ佛國裁判所ノ判決(所持人ノ請求ヲ肯定シタリト假定ス)ニ對シ執行判決ヲ與ヘラルベキヤ否ヤハ日佛條約第一條及第十七條竝ニ我民事訴訟法第二〇〇條、第五一五條二項ニ依リ解決サル可ク之ヲ積極ニ解スベキ乎消極ニ解スベキ乎ハ問題デアアルガ相互保證ナシトシ消極ニ解スベシトノ意見モ相當有カデアアル。

三、假ニ相互保證アリトシテ我民訴二〇〇條三項所定ノ公序良俗ニ反セザルノ要件ヲ具備セリヤ否ヤガ復タ問題デアアル上來述べタ所ニ依テ我國ニ於テハ之ヲ執行スベカラザル判決トナスヲ至當ト思フ、固ヨリ執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セズシテ之ヲ爲スベシ(民訴五一五條一項)トアルガ我國ノ法令慣習又ハ判例

等ニ反スル外國判決ハ勿論同二〇〇條三項ノ趣旨ニ依リ執行判決ヲ拒否スルコトガ出來ル、而シテ廣ク公序良俗ニ反スル判決ト謂ヘルガ故ニ「デイジョン」判決ノ如キハ所謂日本ニ於ケル公序良俗ニ反スル判決トシテ執行ヲ拒否スル餘地ガアリ得ルカラ問題ハ殘ツテ居ルト思フ。

第三款 時效ト其中斷

本件公債利札ハ五年ノ時效ト規定シテアル元本ニ付テハ十年デアアル、而シテ訴訟ヲ提起セズ又支拂ヲ受ケザルモノニ對シテハ佛民法第二、二四四條、第二、二四五條ニ依リ時效ガ完成シツ、アル。

或ハ係争中ダカラ時效完成ノ利益ヲ拋棄シテ吳レト云フ如キ注文ガ佛國所持人カラ彼我ノ大使館ヲ通ジテ我東京市ニ來ル、併シ我東京市ハ契約ニ從ヒ時效ノ利益ハ拋棄セズト答ヘテ居ルノデアアル。

是ニ於テ乎「バンク・フランセーズ」(取引所關係銀行)ハ利札ヲ買入レ(本年二月十二日私ガ實見シタル頃ハ半期ノ利札十二法五十參ヲ十六法ニテ買入レ居レリ)當ニ

我日本ノミナラズ伯利西其他ノ外國公債ノ利札モ買入レテ居ツタ、ソレカアラヌカ各種ノ名義人ニ依テ新訴ハ續々起サレツ、アル。

第五節 結 言

一、要スルニ本件五百法^{フラン}ノ公債ガ其拂込ハ法^{フラン}ヲ以テシ償還モ亦法^{フラン}ヲ以テシ大正六年以來十餘年間元金貳千貳百萬法^{フラン}及利子ノ法^{フラン}拂ニ付キ何等爭ナカリシ生キタル事實ト前述(1)乃至(16)ノ理由等ニ依リ磅公債ノ一部ニ非ズシテ純然タル法^{フラン}公債ナルコトハ詢ニ明瞭デアル。

二、而シテ我東京市ノ態度ハ正論我ニ在リト信ズルガ故ニ何處迄モ争フ可ク新件ニ就テモ悉ク應訴シテ主張ノ貫徹ヲ期シテ居ル。

三、若シモ東京市ノ不利益ニ確定シタルトキハ國際司法裁判所又ハ萬國仲裁裁判所ノ審理ヲ受クルヤ否ヤハ未定デアルガ國際司法裁判所ハ其管轄ニ非ズトスル有力ナル説ガアル、萬國仲裁裁判所ニ付テハ種々前提トナルベキ問題ガアル、「ラント・フランセーズ」問題ニ付佛國ガ英國ニ爲シタル態度ト同一ノ態度ニ出ヅ

ルヤ否ヤハ今豫測ハ出來難イノデアアル、又此等ノ問題ニ付テハ自治體タル東京市ハ一ニ政府ノ助力ニ俟タネバナラス。

四、我大藏省ニ於テハ東京市ノ主張ヲ正當トセラレ駐英ノ財務官モ種々援助ヲ與ヘラレテ居ル、又駐佛大使館ニ於テハ本市ノ爲メニ多年凡有ル便宜ヲ與ヘラレ現、大使ノ如キハ着任匆匆事件ヲ調査シ相當理解シテ居ラレルノデアアル。

五、示談シタラバ良カラウト云フ者モナイデハナイ、又事實申入レモアツタガ何分ニモ條件ガ「デイジョン」判決ヲ基礎トシタモノデアリ其程度モ極メテ低イノデ未ダ問題ニセズニアル。
又飽ク迄主張ヲ貫徹セントシテ居ル東京市ハ今此點ニ付テハ深く考ヘテ居ナイノデアアル。

* * * * *

佛國人ハ由來理解力ニ富メル國民デアアル、本件ニ就テモ争訟ノ結果漸次事實ヲ闡明ニシ我主張ガ公議正論デアルコトガ判ツタナラバ債券所持人等ハ却ツテ

快ク之ヲ受ケ容レテ呉レルデアラウト信ズル。(終)

(昭和七年九月三十日記)

本稿ヲ終ルニ際シ私ガ在巴中大使館各位及森口博士宮島國際労働局理事川上神商教授長島氏、椎名氏及ビ在英國尾崎元市長津島財務官其他内外人諸氏が幾多ノ便宜ヲ與ヘラレタルコトニ對シ深甚ノ謝意ヲ表ス。

尙辯護士「ラベ」博士、「マツス」博士、「ビルディエール」氏及代訟人「ル」コワント博士ノ勞ヲ深謝シ尙今後益々正論ヲ強調セラレンコトヲ希フ次第デアル。

附 錄

第百九十號

明治四十四年十月四日議決

東京市電氣事業公債條例設定之件

東京市電氣事業公債條例左ノ通設定スルモノトス

東京市電氣事業公債條例

- 第一條 本公債ハ電氣事業經營ノ費途ニ充ツル爲英貨券面九百十七萬五千磅ヲ明治四十四年度ニ於テ募集ス
- 前項債額ハ其一部ヲ内國債ニ變更スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ英貨一磅ニ對シ金九圓七十七錢ノ割合ヲ以テ換算ス
- 第二條 本公債ハ銀行又ハ信託業者ヲシテ引受發行セシムルコトヲ得
- 第三條 本公債ノ利子ハ券面金額ニ對シ一年百分ノ五以内トシ發行ノ際之ヲ定

- 二
- 第四條 本公債ニ對シ發行スル證券ハ無記名利札附トス
 - 第五條 本公債ニ對スル利子支拂ハ毎年二回トシ前六月分宛ヲ支拂フ
 - 第六條 本公債ノ利子及元金償還ハ電氣事業特別會計ノ負擔トシ元金ハ募集ノ年ヨリ三十年以内ニ抽籤又ハ其他ノ方法ニ依リ償還ス
 - 第七條 本公債ノ證券ノ種類元利金支拂方法其他ノ手續ハ市參事會ノ議決ヲ經テ市長之ヲ定ム

東京市電氣事業公債條例(其ノ二)

明治四十五年二月二十日市條例第二號

- 第一條 本公債ハ電氣事業經營ノ費途ニ充ツル爲英貨券面九百十七萬五千磅ヲ明治四十四年度ニ於テ募集ス
- 前項債額ハ其一部ヲ佛貨公債ニ變更スルコトヲ得
- 此ノ場合ニ於テ英貨一磅ニ對シ佛貨二十五法二十二參ノ割合ヲ以テ換算ス

- 第二條 本公債ハ銀行又ハ信託業者ヲシテ引受發行ヲセシムルコトヲ得
- 第三條 本公債ノ利子ハ券面金額ニ對シ一年百分ノ五トス
- 第四條 本公債ニ對シ發行スル證券ハ無記名利札附トス
- 第五條 本公債ニ對スル利子支拂ハ毎年二回トシ前六月分宛ヲ支拂フ
- 第六條 本公債ノ利子及元金償還ハ電氣事業特別會計ノ負擔トシ元金ハ明治四十九年以後百分ノ一濟崩法發行額ノ百分ノ一ヲ償還標準年額トシ償還ニ依リ剩生シタル利子額ヲ第二年以下ノ標準年額ニ加ヘ償還スル方法ニ依リ明治八十五年迄ニ抽籤ヲ以テ償還ス但本公債時價額面以下ナルトキハ買入償還ノ方法ニ依ルコトヲ得
- 本公債發行ノ日ヨリ十年ノ後ハ何時ニテモ抽籤ノ方法ニヨリ一部又ハ全部ヲ償還スルコトヲ得
- 但此場合ニ於テハ六月前ニ豫告スルモノトス
- 第七條 本公債ノ元利金ノ支拂ハ電氣事業ノ純收入ヲ以テ優先ニ擔保セララルモノトス

第八條 本公債ノ證券ノ種類、元利金支拂方法其他ノ手續ハ市參事會ノ議決ヲ經テ市長之ヲ定ム

四

東京市電氣事業公債條例(其ノ二)

明治四十五年五月二十二日市條例第三號

第一條 電氣事業公債條例ニ依リ發行スル公債ハ英貨五百十七萬五千磅及佛貨公債一億八十八萬法トス

第二條 英貨公債中三百十七萬五千磅ハ英國ニ於テ二百萬磅ハ北米合衆國ニ於テ發行シ佛貨公債ハ佛國ニ於テ發行ス

第三條 英貨公債證書ハ額面二十磅、百磅、二百磅ノ三種トシ佛貨公債證書ハ額面五百法トス

第四條 公債ノ利子支拂期日ハ三月一日及九月一日トシ第一回ノ利子ハ明治四十五年九月一日之ヲ支拂フモノトス

第五條 北米合衆國及佛國ニ於テ發行スル本公債第一回ノ利札ハ明治四十五年

三月一日ヨリ起算シタル六月分トシ英國ニ於テ發行スル本公債第一回ノ利札ハ發行ノ日ヨリ起算シ拂込期日及金額ニ應ジタル部分利札トス但シ佛國ニ於テ發行ノ本公債ハ發行ノ日ヨリ明治四十五年二月二十九日迄ハ日割利子ヲ支拂フモノトス

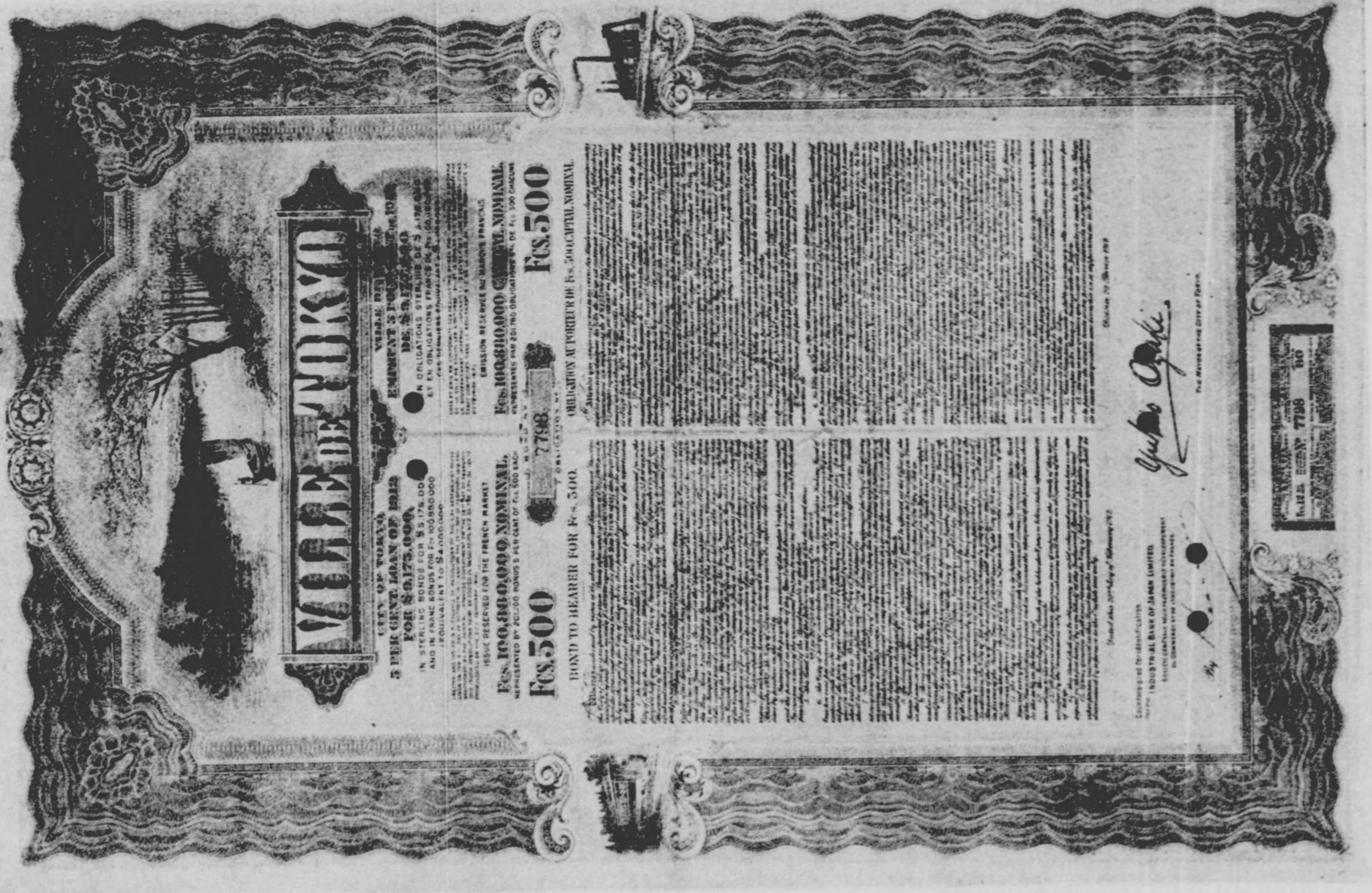
第六條 本公債償還抽籤ハ六月一日償還ハ九月一日トシ第一回抽籤ハ明治四十九年六月一日トス

第七條 本公債元利金ノ支拂ハ電氣事業公債條例第七條ニ規定スル優先擔保ノ外市ノ總收入ヲ以テ一般ニ擔保セラルルモノトシ一般擔保ハ明治三十九年ノ事業公債元利金ヲ特ニ擔保スル收入ヲ除キタル部分ニ付同公債ト同一順位トス

附 則

第八條 本條例第一條及第七條中公債條例トアルハ明治四十五年二月十三日地
第一一七一號ヲ以テ許可ヲ受ケタル本年東京市條例第二號電氣事業公債條例ヲ指ス

23



VOIR DE TOKYO

CITY OF TOKYO
3 PER CENT. LOAN OF 1912
FOR \$2,175,000.
 IN STEELIC BONDS FOR \$1,750,000
 AND IN FRANC BONDS FOR 425,000,000
 EQUIVALENT TO \$425,000.

ISSUE RESERVED FOR THE FRENCH MARKET
Fcs. 100,000,000 NOMINAL.
 REPRESENTED BY 20,000 BONDS PAR VALUE OF Fcs. 5,000 EACH.

Fcs. 500
BOND TO BEARER FOR Fcs. 500.

ISSUE RESERVED FOR THE ENGLISH MARKET
Fcs. 100,000,000 NOMINAL.
 REPRESENTED BY 20,000 BONDS PAR VALUE OF Fcs. 5,000 EACH.

Fcs. 500
BOND TO BEARER FOR Fcs. 500.

[Detailed legal and financial text in French and English, including terms of the loan and interest payments.]

Yuzo Ogaki
 THE MANAGER OF THE CITY OF TOKYO

INDUSTRIAL BANK OF JAPAN LIMITED
 100,000,000 Fcs.
 7786 100



625
203



